

沖縄はいま……その一

復帰10年の現実

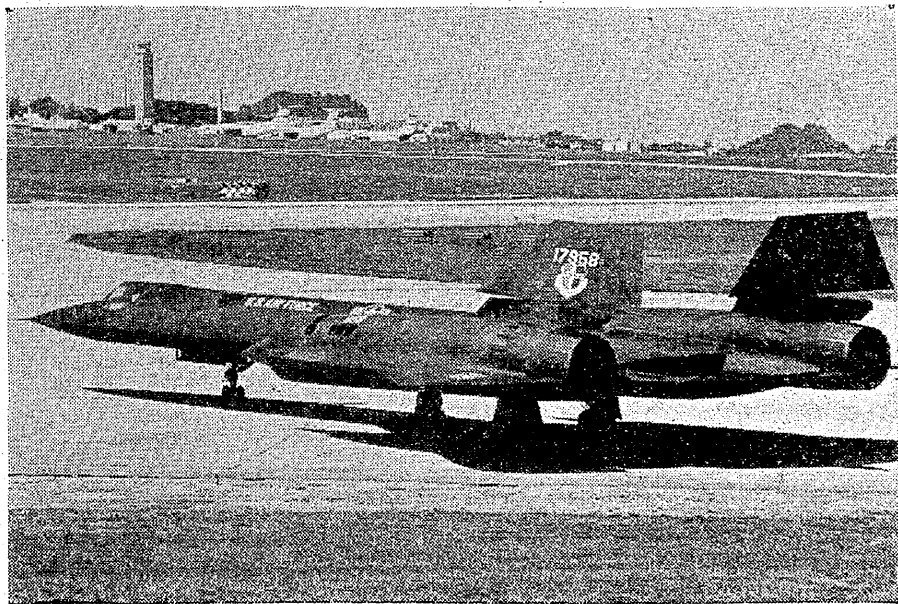
五月十五日——十年前のこの日

基地公害を提訴 嘉手納

沖縄は祖国・日本に復帰した。太平洋戦争で唯一の国内戦場となり多大の犠牲を強いられ、復帰まで二十七年間の長きにわたって米軍政下に置かれ、異民族支配に苦しんできた沖縄県民は、日本復帰に大きな期待をかけた。だがその期待はことごとく裏切られたといえよう。復帰後も米軍基地は居座り続けたまま、狭い県内に日本中の五十三パーセントの基地が集中するという状態は何ひとつ変らない。そのため人命、人権、環境の甚しい被害を受け、地域経済が絶えずおびやかされ、地域文化の崩壊も進んだ。

復帰後十年、希望が失望に変わる中で、沖縄県民は「復帰とは何だった」「日本とは何なのか」を改めて問い直している。

「子どもがね、毎日台風だったって夜間の飛行禁止や昼間の爆音を六十五分以下にすることなどを求めて、那覇地裁沖繩支部に提訴。五月二十日には第一回公判が開かれた。原告団は百人程度といふ。五月二十日には第一回公判が開かれた。原告団は百人程度といふ。五月二十日には第一回公判が開かれた。原告団は百人程度といふ。」



「それだけみんな爆音に苦しめられていて、このことだ」と照屋さん。「被害の実証、裁判費用など見通しは厳しいが、住民の苦痛を知らせ、人間の住める状態にするの信念でぶつかるといふつもりです」と一歩も退かぬ決意だ。

今年二月二十六日、国を相手と

【写真は嘉手納基地に到着する最新鋭偵察機SR71。マッハ三・三といわれ、沖縄—東京間をわずか二十分で飛ぶという】

弾よけてきた沖縄

いまでも残る戦火の傷痕

沖縄本島南部には各県の慰霊碑が林立している。有名な「ひめゆりの塔」もある。戦跡めぐりの観光客が毎日走りまわり、観光客が列をついて往來している。

だが「ひめゆりの塔」から数メートルの国道をいには、沖縄戦で一家が全滅し、跡をつぐ者もなく草むすまに放置された宅地が点在していた。

慰霊碑の一つ「山形の塔」のわきには、何の表示もない洞くつが口を開けていた。洞内には、軍靴も失いました。あれだけ苦し

と安里さんは語る。

「こわいのは教育ですね。お国のために、天皇陛下のために、と信じこまされ、助かる命を失ったのですから」

安里さんが言う通りだ。非戦闘員である住民の悲惨な犠牲、文字通りの血の河、死屍の山は天皇制を守るために払われた代償なのである。

沖縄戦を問うことは、戦後民主主義を問うことであり、その出発点となった戦争責任を問うことである。そしてそのことは、日本の琉球支配にさかのぼる歴史を問う返すことにもつながっていくだろう。

炭鉱

今も昔も

昔、筑豊のある小さな炭坑に、ある日監督官が点検入坑することになった。あわてた炭坑主は、見られてはまずい坑道の入口をマイトでもってふさいでしまった。

監督官には「この坑道は終掘したので、つぶしました」と説明していた。

監督官が点検を終えて帰ってしまつと、マイトでふさいだ箇所を急いで取り開け、石炭を掘りはじめた。会社からなめられているのだろ

三片から四片への入道官庁検査がある日監督官が点検入坑することになった。あわてた炭坑主は、見られてはまずい坑道の入口をマイトでもってふさいでしまった。

監督官には「この坑道は終掘したので、つぶしました」と説明していた。

監督官が点検を終えて帰ってしまつと、マイトでふさいだ箇所を急いで取り開け、石炭を掘りはじめた。会社からなめられているのだろ

今、三池炭鉱三川鉱あり、昭和五十七年四月二十八日のこと。本層七十坪四坪開始にとともに、十号、五月十一日号から

（十八分合戦場新聞「交流」）

早く「三池炭鉱労働組合」を送ってくださったという、ありがとうございました。

福岡中学校の本年度歓迎会を、四月二十三日に津屋崎町の「魚正」で行いました。

私たちの分には、あの三池闘争に参加した者が五人残っています。ちょうど久保さんの事件の直前、直後に動員を受けた者たちばかりです。門の前での座り込みや、間違えて青年行動隊に混って走らされたこと、社宅の警備や泊り込みなど、思い出のある者たちです。

いよいよ校長を送る歌を唄う場面がやってきた時、私たち五人はステージに上がりました。

婦人部の先生も続いて上がり、十人ほどが合唱することになりました。急ごしらえの紙鉢巻、ピアノで入れたテープをまわして、何度も何度も歌いました。

何度も何度も「炭掘る仲間」を

——教職員の歓送迎会で——

あがとうございました。お便りをいただいたのは、福岡県宗像郡福岡町井尻、福岡中学校の山内照夫さんです。こんどもともにがんばりましょう。

釣りキチ余談 連載第五回

セゴ釣り変じての巻

十九分合 (三川) 石田 鈍竿

昭和三十年頃だったと思うが十一月初旬、今の四山鉱地先の堤防先端の坊主にいた二人連れが、帰りの途中に俺の所へやって置くのいいだろうと、干潮ごろを見ながら油の切れた自転車まで釣りに向かった。

堤防に添って調査をしたがふだんと少しも変わっていない。「おかしいなあ、下手くそになったつじやろか……いや、今年は魚の少なかつたばい」

最後には自分の腕を棚にあげてみるかと腰を上げ、堤防に上がった。

「さて、今から本釣りの東側の砂地に降りて一杯やり出した。いい気分になった頃、泡ぶくを先頭に、地をなめるようにして潮が押し寄せてきた。波濤船が東側に泥を吐き出したためにできた河状のくぼきにも潮が溜まり出した。

グチ、小セゴは潮を追ってくるといふことを、ガンバの徒歩釣りの経験で思い出し、餌はたふりあるし、退屈しのぎにやってみるか、とくぼきに竿を延ばした。

エサが底に着いたかな、と思う間もなく穂先をぐいぐい引く張られ、あわてて竿を手を持つと、確かな手がえがある。よいしよと抜き上げると、気味の悪いぐらゐの大ウナギである。

「たまげたたまげた、スタミナどんどん」

軽口をたたきながら予備の竿も出して振り込むと、煙草に火をつける暇もないくらいに次々と食らいついてくる。なんでも食うわ、俺の口に入つたのは三きれぐらゐだったろうか。